The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西山宗因と伊勢松坂
Author(s)	島津, 忠夫
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70904
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

西山宗因と伊勢松坂

島津忠夫

一

西山宗因と伊勢については、尾形仂[1]・野間光辰[2]両氏の考察があり、野間氏も「宗因の山田下向は、松坂へのついでに行なわれている」ことを注意されてはいたが、ここ数年『西山宗因全集』に関与して、宗因が従来は伊勢の山田に滞在していたと考えられて来たことが、実は松坂にいて山田に往来することが多かったのではないかと思われるようになった。そのことは、尾崎千佳氏の「西山宗因年譜[3]」に反映されているし、岡本勝氏の『近世三重の俳人たち[4]』に主要な資料はすでに紹介されているのであるが、なお残された問題も多く私見をまとめておくことも意義のないことではないと思う。

二

松坂は伊勢国飯高郡に属し、伊勢街道に位置していて[5]、山田とは深いかかわりを持ちつつ別の文化圏を持っていた。『松坂権輿雑集[6]』によれば、天正十六年に蒲生氏郷が阪内川（さかないがわ）下流の四五百杜（よいほのもり）に松坂城を築いた城下町で、同十八年に氏郷が会津へ移封の後、服部一忠、古田重勝を経て、元和五年の徳川頼宣の和歌山入城に伴いその領有となった。以後は伊勢における紀州藩領の政治的中心としての機能は維持しつつ、商業町・宿場町として発展することとなる。松坂には本居宣長以前の事情を知る資料は極めて少ないが、岡本勝氏の「宣長と松阪[7]」には、松坂が「近世初期から文化水準の高い町」であったことを指摘されている。

俳諧においては、万治二年十一月刊『伊勢俳諧新発句帳』に「松坂分」として春陽軒加友以下四十八人が入集している。まだ宗因とのかかわりのない時点で、松坂が伊勢では山田についで俳諧の盛んな地域であった。その加友は、はじめ望一門、後に松永貞徳に従ったという。寛文七年十一月自序（寛文八年五月下旬刊）の『伊勢踊』を編んでいるが、その中には七十八人の松坂の

人が入集している。ただ加友は句引に「伊勢山田住」とあり、この頃は山田に移住していた。この撰集には、宗因の句が「大坂西山氏　一幽」として三句見える。

連歌では、里村昌穩が晩年松坂に住んでいたことを注意すべきであろう。昌穩の里村家での位置は未詳で、『昌穩句集』[8]に、

亡父十七年忌

まつ虫も音になきよるかこけの下

の句が見えるのみで、その「亡父」がいかなる人かわからないが、あるいは松坂の人で、そのゆかりで松坂に移住したのかとも考えられる。元和六年一月二十四日の『何舟百韻』以降、里村南家の昌琢の会席に一座するが、元和九年十一月十五日の『山何百韻』は、第三をよんでいる宗為が熊本藩家老並河志摩守で、この折の昌琢の発句が柿衞文庫蔵『発句帳　昌琢』に「並川志州、江戸より上洛の折」と見え、加藤家伏見屋敷での興行であることが知られ、また連衆がほぼ一致し、昌琢の発句が同じく『発句帳　昌琢』に「并川志州江戸より上之刻興行」とある年次未詳『何人百韻』も、ほぼこの頃の興行と考えられる。そのいずれにも、行生（北左平次。加藤忠広の御供衆で里村家入門）とともに加藤家の縁に繋がって加わっているのだが、前年の八年に上京し里村家の学寮に入門して昌琢に連歌を学んでいた宗因（当時は豊一）が同座している。その後の寛永期の連歌では、昌穩は年末年始の江戸での一座は見られるものの、京都での一座作品が見られないから、あるいは寛永の始め頃から松坂に居を移していたのではなかろうか。

昌穩の伊勢山田との関係については、奥野純一氏『伊勢神宮神官連歌』[9]に詳しい。『氏富記』慶安三年八月二十一日の条によれば、山田で客死し、荒木田氏富は「我等儀昌穩事、互ニ親と子と頼罷有」（山脇立庵宛書簡）という。神宮関係の資料が多く残っているが、実は昌穩が松坂に住み、松坂から山田に出向いていたことは、『伊勢正直集』や『伊勢踊音頭集』の句引「松坂住」の中に見え、『宗因発句帳』に、「松坂昌穩庵」「松坂昌穩古跡」「松坂行止斎〔昌穩〕古跡」とあることから明らかである。『昌穩句集』には、昌琢の一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌（二月五日）の忌日によんだ発句が見える。正保五年二月三日の『昌琢十三回忌百韻』は、里村南家の昌程の発句であるが、北家が玄的、玄祥（玄仲の子）、仍春、玄三（号から北家か）と加わっている一座で、脇が昌佐であることから、瀬川家の昌佐による江戸での興行に、松坂より下向して加わったと考えられ、昌琢十三回忌は京都では二月五日に昌俔発句で興行されているが、それには加わらず、忌日の五日に発句をよんでいる。「昌琢老手跡かけ物にて興行」という前書のある句もあり、昌琢門という意識をもって松坂の連歌を指導し、山田や熱田へも赴いていたものと思われる。『昌穩句集』に、多くの江戸での句が見えており、松坂から新年の柳営連歌に一座していたものと思われ、昌穩一座の現存最後の作品も、慶安二年一月二十日の昌程発句の柳営の会であった。当時松坂から江戸に進出する商人が多く、その海路が開かれていた

こととも関わりがあろう。

樹敬寺にて

むすびよりてすゞしきをしる法の水

の句が『昌穏句集』に見える。この句の「結ぶ」は、「水を結ぶ」と「庵を結ぶ」を掛けていて、昌穏庵が樹敬寺にあったことが知られる。樹敬寺は、『松坂権輿雑集』の「新町」に、「法幢山樹敬寺、宝延院浄土宗、京都知恩院の末」と見え、嶺松院・歓喜庵・何似院・法樹院・浄安院・応称院・深信院・林照院の塔頭があり、加友は法樹院の庵主であった。『宗因発句帳』に、

松坂昌穏古跡にて

植し時かゝれとてこそ雪の松

という句があるが、実は、後述する石水博物館蔵『於豊前小倉御城御賀千句』付載の「当地にて宗因老発句」（以下私に『俊正集め句』と呼ぶ）に、

かゝれとて松やはうへし雪の庭

是は嶺松院にて

と見える宗因の句は、句形に小異があるが同じ句で、昌穏追悼句であり、昌穏は樹敬寺の塔頭嶺松院にいたことになる。『伊勢踊音頭集』には、

開眼寺の花みに

ふき出してわらふや花に松の風

の句が見え、開眼寺は、『松坂権輿雑集』の「油屋町」に、「仏心山開眼寺、禅宗、松坂養泉寺の末」とある寺で、松坂衆の俳諧仲間とも親しかったものと思われる。『昌穏句集』に「松坂にて」とある句は、「花に鳥の休らふさとへあまつかり」のほかには見えないが、特に前書に記していない句も多く松坂でよまれたものかと思われる。

三

松坂昌穏庵ニ一宿

旅ねとへ宿は一志の浦千鳥

として『宗因発句帳』に見える句は、昌穏が没する慶安三年八月二十一日以前の句で、季語が千鳥であるから、慶安二年以前の冬の句となる。[10]「年譜」に徴しても、その年次を特定することはむつかしい。ただ、寛永二十一年八月の加藤正方の広島松平家お預けとなる以後にはその年次を見いだしにくく、

伊勢参宮に

ふみ初つ豊の宮路のけさの霜（宗因発句帳）

とあるのと同じ時期の、寛永二十年以前の某年冬であろうと思われる。この句は、『三籟集』には「初めて参宮せし時」と見え、これが宗因の最初の伊勢参宮であるが、伊勢の記録に残っていないのは、まだ宗因の連歌師としての知名度が高くなかった時期であったからと思われる。この参宮が、主君正方の復帰と宗因自身連歌師として立つ祈願を兼ねての参宮であったとすれば、「年譜」に徴して、寛永十一年以降のかなり早い時期ではなかったか。後年、

勢州にて、むかし「一志の浦千鳥」とつかうまつりしを思出て

磯千鳥きけばはやくの旅ね哉（宗因発句帳）

の句をよんでいることからも、まだ連歌師としては初心の頃の宗因にとって、かつて昌穏庵に一宿したことが特に印象深かったものと思われる。明暦二年六月には、

勢州松坂昌穏七回忌

年なみは其水無月の早瀬かな（宗因発句帳）

の句を手向け、

松坂昌穏古跡にて

植し時かゝれとてこそ雪の松（宗因発句帳。前述の追悼句）

松坂行止斎古跡にて

数たらぬひとりや千人月の友（宗因発句帳）

など、松坂を訪れた時には、昌穏古跡で追悼句をよんでいる。宗因と松坂を考える時、昌穏は最初の重要な人と言えるのではないかと思う。

四

宗因は、万治三年の四月頃、伊勢に下向し、翌四年正月頃まで滞在する。「竹の子や井垣の内へぬけ参」（『境海草』万治三年七月刊）の句は、『玉手箱』（延宝七年刊）に「参宮の折ふし」の前書が見える。七月頃、外宮月次連歌初めに出座していることは、『宗因発句帳』の句から知られるが、

月次初会に月よみのもりにて

月よみやよむともつきじ懐紙神

の『遠近集』の句は、『遠近集』が寛文六年刊であるが、寛文元年にはいちおう撰了していたことからこの頃の句で、俳諧にも興じていた。十月二十日夜には、路草久保倉右近亭で興歌に興じたりしている。[11]

山田での資料が多く現存するが、前述の「松坂昌穏古跡」を訪ねての「植し時」の句も、昌穏庵に一宿した折の句を思い出してよんだ「磯千鳥」の句も、「年譜」に指摘するようにこの折と推定され、前述の嶺松院での句もこの折のものと推定する。この間、宗因は、多く松坂に滞在していて、九月二十三日の正方十三回忌の『懐旧連歌百韻』の独吟もこの伊勢滞在中のことであるが、それも松坂であったと見てよい。『伊勢正直集』に十一句入集していることも、この折の松坂衆との交わりとかかわりがあり、この集に初出の句の多くは、この折のものと思われる。万治四年正月十一日には、伊勢大神宮法楽『初何百韻』（八代市立博物館蔵）を宗春と両吟でよみ奉納する。宗春は万治二年に歳旦吟をよんでおり、連歌師として立つ報告の意もあって、この伊勢大神宮法楽『初何百韻』のためにだけ下向したのではないかと思われる。

五

次に宗因が伊勢に下向するのは、寛文十三年である。この折は、多くの資料があって足跡はかなり明らかになる。

まず、宗因自筆『伊勢道中句懐紙』[12]を掲げる。

宗春在京、旅宿にて一会　　宗因

袖にうつせあふげば月の都人

三井小三郎興行

荻風に我はわれとや萩の露

参宮道中、白子浦不断桜の花をみて

あなめづら花に桜の下紅葉

白子浦より松坂へ、舟にて

伊勢海にゐで行月の夜舟哉

松坂にて興行共

八月十五夜

浦の名も月よりいづる渚哉

まねかれし故よしもがな花すゝき

遠山田かりがね告る朝戸哉

鵙ぞ鳴たが夕暮の窓の竹

花野分しめにも珍し庭の秋

七月上旬、伊勢の旅に出た京都の旅宿で、宗春も在京しての一座があり、次いでおそらくこれも京都での三井小三郎興行の一座がある。宛先未詳の六月十四日付け「宗因書簡」[13]に、「あまり去年より歩行不仕、蟄居。気晴しニ、先伏見へ十六日ニ罷上申候。暑気別ノ事も無御座候に、勢州へ春ノ時分より招申方御座候間、直ニ可参かと存候。」とあるのは、この年のことと考えられ、伏見より伊勢行となったのである。東海道を経て日永追分から伊勢街道に入り、松坂と同じく紀州藩領であった白子山観音寺の不断桜を見て、白子浦から舟で松坂の湊に着き、松坂にしばし逗留するのである。

『俊正集め句』は、延宝七年の句をはじめに順次挙げ、後半は以前の句を思い出して記していて、その中に『伊勢道中句懐紙』と共通する句があり、「浦の名も」の句が俊正亭、「花野分」の句が忠弘亭での句であることが知られる。宗因は、八月十五日頃、松坂の湊に着き、先ずは俊正亭の月見の一座に臨んだのであった。「浦の名も月よりいづる渚哉」の宗因の句は、『宗因発句帳』に「勢州清渚にて」として見え、句意からも海浜の句と考えられる。俊正亭は観音小路（しょうじ）（中町）にあるが、松坂の湊近くに別邸があったか[14]。

俊正は、『松坂権輿雑集』の「中町」に、「観音小路諸家之事」として、「一　岡山又右衛門法名除清、二代又右衛門法名俊正」と見え、季吟の『伊勢紀行』には、「俊正は天満の西翁としたしかりし人にて」とある。この折の宗因の下向も俊正が招いたものと思われる。前述の「松坂行止斎古跡にて」の「数たらぬひとりや千人月の友」の句も「年譜」に指摘するように同じくこの頃の句で、この句の句意からも昌穏が松坂連歌衆と親しい関係にあったことが知られよう。

梅をかざすそれより春の姿哉

是は岡寺千句巻頭

と『俊正集め句』にある句は、『宗因発句帳』に「勢州松坂にて、

千句第一」（『三籟集』も同じ前書）と見え、『三籟集』には、ほかに宗春の、

勢州松坂にて、千句

百鳥の事ざましなり郭公

がある。『氏富卿日記』所収寛文十三年八月十三日付宗因宛氏富書簡には、「一詠老・宗春老は、千句成就之後、御帰可有之由、御尤存候」と見え、この千句には、天王寺一詠と宗春が参加していたこと、宗因・宗春の発句から四季題千句であったことが知られる。『松坂権輿雑集』の「中町」に、「岡寺山継松寺、如意院真言古義、高野山蓮花三昧院の末」と見え、俊正の住む観音小路は、継松寺への参詣の通路に当たる。この千句の興行も俊正の催したものと思われる。その後、九月はじめに宗因はひとり山田へ向かう。山田にての宗因の行動は、すでに前掲の野間氏らの考察に明らかにされているし、「年譜」に譲る。浅熊山金剛証寺に参詣したり、九月十三日の西行谷の連歌に臨んだりしているが、十月には、松坂に戻っており、『俊正集め句』の「是は安貞にて」とある「山里に聞なす軒の時雨哉」の句は、『宗因発句帳』に「松坂隠居の人興行」とある句で、この折の句と思われる。安貞は油屋町田丸屋の二代目青木安貞で、『松坂権輿雑集』には「二代市兵衛表徳安貞、大坂花本宗因の門弟二而連歌を好、元禄十五年午四月十日七十歳にして死す」と見える。宗因は、その後、松坂からまっすぐ帰坂し、十一月には明石下向、松平信之を訪問しているが、十二月十九日付荒木田氏富宛書簡には、「去秋は始て得御意、度々之御会席にて心安申承、本懐之至に存候」と見え、氏富との交遊はこの度の伊勢下向に始まったことを記している。さらに、西行谷での懐紙を、「松坂迄之便遣候間、岡又右衛門方より進上仕候」とあり、「岡又右衛門」は『氏富卿日記』の誤写で岡山又右衛門俊正であると思われ、俊正との親昵さが知られる。

六

次の伊勢下向は延宝四年で、九月か十月に松坂に下向したものと思われる。十月二十一日に氏富を訪問（二十二日付氏富書状）、十一月二十三日まで、山田にて内外宮の神官との一座に加わっている。その後、松坂に戻り、結局越年することなく、十二月二日松坂出立、帰坂の途に着く（十二月十日付宗因宛藤波氏守書状）。この折の松坂での動向を知る資料は特に存在しないが、やはり多くの雅会があったことも察せられる。

翌延宝五年には、藤堂佐渡守高通（任口。季吟門）の招聘を受けて、十二月三日久居着、十二日まで滞在して、十三日には津まで来たが、閏十二月十三日付氏富宛宗因書状に「当地初て参、毎度之参会、寒気之節、以之外草臥申候。松坂衆よりも、近所故切々便に、早々隙明次第待入候由、被申越候へども、越年は各別、一夕二夕は、折から物さはがしき節気、不心静、用なき事と存返して、津より真直に十四日に発足仕候」とあるように、山田下向の要請や、松坂衆からの招きも諦めて、十四日に津を立ち、おそらくは関を経て東海道から帰坂したものと思われる。

七

次は延宝七年五月に松坂に下向する。『梅酒十歌仙』に「比は五月の半」とあり、天満の幸方および如見宅での俳諧十歌仙をすませて、まもなく十五日には、松坂の定之興行の『何人百韻』に臨んでいる。『梅酒十歌仙』の序に、「先生、下地あり、草臥あり、成まじきよし仰られしを、をの〳〵しゐて今一つ今一巻など云うちに、其日も暮行。又の日、予が草宅に請待して残りをつぐ」とあるのは、この頃すでに宗因が俳諧に倦んでいたと解されることもあったが、松坂下向が決まっていて心が急いていたのではないかと思う。

発句・脇・第三を掲げる。

五月雨も旅居にまくる日数哉　　宗因
山ほとゝぎす音づるゝ宿　　定之
うつし植し軒の橘花さきて　　道方

以下連衆は、玄室・江由・加伝・玄智・如休・道本・俊正・正繁・吉之・安貞で、江由・加伝・玄智以外は『俊正集め句』に見え、いずれも松坂衆であった。そのうち、前出の俊正・安貞のほかに、『松坂権輿雑集』から、道方が本町住小津清兵衛、江由が白粉町住松本七郎次郎、道本が本町住竹内三郎左衛門と知られる。加伝は『伊勢踊』に春楊軒と見え、加友の軒号を継ぎ、山田移住のあとを託されたようだ。玄智も『伊勢踊』に松坂住坂井氏として見える。興行主の定之は、前掲の野間氏論考では荒木氏とする。『松坂権輿雑集』の「中町諸家之事」に「荒木山三郎法名浄悦」「二代山三郎法名松亭」が見え、松亭は「浄悦の二男、表徳冬丸、清水谷家の門弟にて歌道を好む」と見える。季吟の『伊勢紀行』の折は、もっぱら荒木定道が案内している。この定之も、荒木氏と思われる。

その五月十六日付外宮長官（度会満彦）・内宮長官（氏富）連署の書簡には、松坂滞在中の宗因のもとへ迎えの使を遣す意が記され、宗因は、五月十六日付での返書で、「明日・明後日兼約之会御座候間、此元仕廻申候て、岡山又右衛門同心可仕候間、重て御迎御無用に被成可被下候」と記している。十七日、十八日の松坂での会（『俊正集め句』に見える如休亭・玄室亭か）を済ませて、十九日に俊正同道で、山田の吉村玄碩方に着いている。五月二十六日の氏富亭の一座、二十七日は西行谷へ招かれ、二十八日は内宮岩井田尚令亭連歌に出ていることが、『神宮引付日用記』[15]などから知られるが、その後松坂に戻ったものと思われる。六月二十六日の今度は外宮の満彦亭の連歌に、松坂より山田に赴き、七月九日外宮三祢宜松木因彦亭連歌まで、あちこち出座。七月六日付で山田より岡山為右衛門宛に送った書状には[16]「打続気□不存候へ共、草臥、津にても断り可申入と存候。何卒約束をはやく仕舞候て、大阪之迎待得申度候」といっている。「宇治の千句の事、修理・允哉へ申遣候。発句なし。定り次第、可申進候。□□御座候はんと思召候はゞ、可有御入来、さん〳〵苦労成事之、中々おもしろげも有間敷存候。此旨道本へも、御心得被仰可被下候」と

あり、この「宇治の千句」は、七月二十五日から二十七日にかけて氏富家で興行された千句で、俊正・道本に出座を誘ったのではないかと思う。俊正はこの千句に一座している。宗因は、段取りを付けて、いったん松坂に戻り、俊正同道で参加したものと思われる。この千句を終えてまた松坂に戻り、『俊正集め句』に見える諸所の一座に臨んでいる。「勢州松坂にて物語講ぜし時」の前書のある「人有けり伊勢物がたりによるの月　梅翁」の鉄心斎文庫蔵宗因真蹟短冊があり、この頃松坂衆に『伊勢物語』を講義している。後に季吟も「岡寺といふ観自在菩薩のおはします所」（継松寺）で、松坂の好士を集めて『伊勢物語』を講じていて（『伊勢紀行』）、松坂衆にとって『伊勢物語』は特に関心のある古典であった。

九月上旬、久居の任口よりの招きに津の道因という人と同道で訪れ一宿、白塚（津市白塚町。当時は一部紀州藩白子領）、津でもそれぞれ一宿、伏見に昼時分に着き、夜舟で下り十日に帰坂する。[17]

延宝九年（一六八一）三四月ごろ参宮を予定していたことが、正月十日付藤波修理〔氏守〕宛宗因書簡により知られるが、この計画は結局実現しなかったので、宗因の伊勢行は延宝七年が最後となった。

八

松坂においてとくに宗因と関係の深かった俊正は、『松坂権輿雑集』に、

茶式を好、兼而諸芸ニ譁（通とも）。此段達対山君御耳、元禄十四巳年紀府に被召寄、七人扶持金子弐拾両宛被為下置、為御雇奉仕。

と見える。対山君は紀伊徳川家二代光貞で、初代頼宣の嫡男、寛文七年五月十九日相続、元禄十一年四月二十二日に家督を綱教に譲り、薙髪して対山君と称し、宝永二年八月八日逝去する。俊正が、諸芸に通じていたことが、家督を譲った対山君の耳に達し、元禄十四年に召し寄せられたということは、松坂衆と紀州藩とのかかわりが深かったことが知られる。

紀州藩初代の頼宣の正妻は加藤清正の娘八十姫（やそひめ）であった。瑶林院とよばれたこの人のことは、水野勝之・福田正秀両氏著『続加藤清正「妻子」の研究』[18]に詳しい。頼宣と瑶林院との仲はきわめて睦まじかったという。慶長十五年九月、婚姻の上使として肥後に下向したのが家老の三浦為春で、その折の紀行が『太笑記』であった。元和八年四月二十七日、まだ十八歳の宗因（当時は豊一）は、頼宣の勧請した紀州東照宮の祭礼に列し、戸田藤左衛門隆重亭の連歌歌仙に一座し、同じく四月二十日には、三浦為春亭での連歌五十韻に一座している。紀州徳川家と宗因との関係は、この頃から芽生えがあった。宗因が松坂衆と深い交わりがあったことも、この紀州徳川家と加藤家の姻戚関係も一つの因であったことが察せられる。松坂衆も加藤家ゆかりの宗因に特に親しみを感じていたかと思われるからである。詳しいことはわからないが、

松坂だけでなく先述のように白塚衆とのかかわりも同様に考えることも出来よう。

九

これまで『俊正集め句』と称して何度も触れて来た石水博物館蔵『於豊前小倉御城御賀千句』[19]付載の「当地にて宗因老発句」は、宗因と松坂を考える上にきわめて重要な資料であるので、ここに全文を挙げ、注を付しておきたい。この書は、小本（縦一五・五糎、横一一・一糎）一冊。綴葉装（五綴）。後装表紙朽葉色。もとは表紙も共紙。墨付八六丁。各丁七行書。外題はない。岡山俊正自筆。はじめに「於豊前小倉御城御賀千句」とあり、これは小倉千句（寛文五年二月）で、次に「播州にて」として、延宝二年七月十一日興行「人磨社法楽百韻」を記し、そのあとの三丁に、松坂にての宗因の発句が書き留められている。奥書によれば、延宝九年六月重直の望みにより書き与えたものであった。重直は同時代に宗因とかかわりのある人物を求めるならば、水守重直か。延宝六年旨恕編『難波風』に、幾音・益友・旨恕との四吟百韻があり、延宝九年『西鶴大矢数』（第二発句）、『東日記』（大坂重直）、天和元年『熱田宮雀』、天和二年『俳諧百人一句難波色紙』（「花をうつ雨や報て棒振むし　水守重直」）と見える。『定本西鶴全集』頭注にも、「水守重直　未詳」とあって詳しいことはわからないが、大坂の俳壇で、宗因とかかりのある幾音・益友・旨恕や西鶴とともに活躍していた俳人であった。俊正との直接の関わりは不明だが、宗因の句を所望したものかと思われる。

〔翻刻に当たっては句頭に通し番号を付し、私に濁点・句読点を施した。私注は〔　〕に包んで適宜加えた。「発句帳」は『宗因発句帳』、『三籟集』とともに、『西山宗因全集』の番号を付記した。『松坂権興雑集』は「権興雑集」と略称する〕。

当地にて宗因老発句

道本亭にて

1二度に見ばや盛を萩薄〔発句帳668。三籟集1609。年譜は延宝七年。道本は、竹内三郎左衛門（権興雑集）。伊勢正直集に三句入集〕

俊正亭

2人はいさ宿は待てふ虫の声〔発句帳681。三籟集1633。年譜は延宝七年。俊正は岡山又右衛門（権興雑集）〕

忠弘亭

3朝きよめ水なそゝきそ露の庭〔発句帳705。三籟集1666。年譜は延宝七年。忠弘は伊勢正直集に一句入集〕

忠栄にて

4更に花ありとも菊の籬哉〔発句帳933。三籟集2104。年譜は延宝七年〕

吉隆にて

5幾日あらば今幾しほの初柗〔発句帳956。三籟集2160。年譜は延宝七年。吉隆は伊勢正直集に二句入集。川口氏〕

信定亭

6四方にあそぶ今宵は月を主哉〔発句帳873（「松坂にて」）。三籟集1973（「同所〔松坂〕にて」）。年譜は延宝七年〕

安貞にて

7花野分いたる所や月の宿〔発句帳843（「松坂にて」）。三籟集1875（「松坂にて」）。年譜は延宝七年。安貞は青木市兵衛〕

吉之にて

8霧の海の干潟の玉か朝日影〔発句帳733（「勢州にて」「塩干の玉か」）。三籟集1710（「伊勢にて」「汐干の玉か」）。年譜は延宝七年。吉之は、伊勢正直集に三句、伊勢踊音頭集に十八句入集。藤村氏〕

正繁にて

9是さへやあるじにとへば薄桧〔発句帳976。三籟集2180。年譜は延宝七年〕

従能亭

10正に夜の長きにたぐふきぬた哉〔発句帳898。三籟集2063。年譜は延宝七年〕

謙也にて

11名残かもしらず老木の秋の色〔発句帳977（「勢州松坂餞別に」）。三籟集2181（「勢州にて、餞別」）。年譜は延宝七年。謙也は、伊勢正直集に一句入集。慶聚院（中町）〕

俊正にて

さはる事ありてこもり居ければ

12よしや月物はかくこそ今日の雨〔発句帳872（「雨天当座」）。三籟集1972（「松坂にて、雨天当座」）。年譜は延宝七年〕

道本にて

13うづら鳴野は行人の夕哉〔発句帳757。三籟集2067。年譜は延宝七年〕

道方にて

14行年のいそげばこそあれ旅の宿〔発句帳1320（「旅宿にて」）。三籟集2799。年譜は延宝四年。延宝七年は九月上旬に松坂から久居・白塚を経て九月十日に帰坂しているので、句意からすればそれが妥当だが、ここは延宝七年の句が並んでいるところであることが不審　道方は本町住小津清兵衛（権輿雑集）〕。

如休にて

15門は樗花こそちらめ下涼み〔発句帳477。三籟集1214。年譜は延宝七年〕

定之にて

16五月雨も旅ゐにまくる日数哉〔発句帳471。三籟集1197。延宝七年五月十三日の百韻現存。定之は荒木氏〕

玄室にて

17答ぬや水鶏にならふ夜の門〔発句帳506。三籟集1267。年譜は延宝七年〕

〔ここからは、句のよまれた場所を句のあとに記す。俊正の控えに記されていた延宝七年以前の折の句を集めるか〕

18うづみ火はたゞ故郷のね覚哉〔発句帳1270（「旅ねかな」）。三籟集2717（「旅ねかな」）〕

19かゝれとて松やはうへし雪の庭〔発句帳1214（「松坂昌穏古跡にて／植し時かゝれとてこそ雪の松」）。三籟集2585。（「松坂昌穏古跡にて／うへし時かゝれとてこそ雪の松」）。宗因の改作か〕

是は嶺松院にて〔「嶺」の字体は「岩」に近いが「嶺」か。「この前書は「うづみ火は」にもかかる。この二句嶺松院での句で、万治三年か〕

20花野分し目にもめづらし庭の秋

是は忠弘にて〔発句帳752。三籟集1758。『伊勢道中句懐紙』に見え、寛文十三年の句。忠弘は伊勢正直集に一句入集〕。

21山里に聞なす軒の時雨哉

是は安貞にて〔発句帳1055（「松坂隠居の人興行」）。三籟集2343（「松坂にて隠居の人興行」）。年譜は寛文十三年。〕

22浦の名の月より出る渚哉

是は俊正にて〔発句帳867（「勢州清渚にて」）。三籟集1967（「清渚にて」）。『伊勢道中句懐紙』に見え、寛文十三年〕

23去年の夏むすび置てし清水哉

是は道本にて〔年譜は延宝七年。この位置にあることに不審。万治三年の可能性もあるか〕

24昼ふしの其間を秋の扇哉

是は俊正にて〔発句帳516（「其間は」）。三籟集1308（「その間は」）。寛文十三年〕

25梅をかざすそれより春の姿哉

是は岡寺千句巻頭〔発句帳107（「勢州松坂にて、千句第一」）。三籟集226（「勢州松坂にて、千句第一」）。年譜は寛文十三年。岡寺は、岡寺山継松寺（権輿雑集）〕

発句ども前後のわいだめもなくおもひ出すまゝに書付侍るもの也。

〔これは、最後の八六丁の裏が白紙になっていたところに、次の表紙裏に書かれた奥書に近く書かれていて、特に18以降の句の並びをいうか〕。

延宝九年酉六月、より重直丈、望によりて、見ぐるしき恥らひもなく、かつは形見にもとおもひて

俊正（花押）

注

（1）「宗因と伊勢」（「連歌俳諧研究」5、昭和二十八年十月）

（2）「新編宗因書簡集」（「国語国文」昭和二十九年十月）、「連歌師宗因」（「国語国文」昭和二十八年九月）

（3）『西山宗因全集』第五巻所収。以下、「年譜」と略称。

（4）平成十二年、おうふう刊。

（5）蒲生氏郷は松坂城を築城するに当たって海岸よりの参宮街道を

城下に引き入れた（『角川日本地名大辞典』）。

（6）桜井祐吉氏編、大正八年刊『校本松坂権輿雑集』による。

（7）「宣長と松阪」（「解釈と鑑賞」平成十四年九月、『近世文学論叢』平成二十一年、おうふう刊所収）。

（8）広島大学福井文庫蔵本（国文学研究資料館の紙焼きによる）を同系の静嘉堂文庫マイクロの「連歌集書」本と比較して用いた。

（9）昭和五十年、日本学術振興会刊。

（10）「一志の浦千鳥」は「一志の浦」と「浦千鳥」を掛けており、昌穏の宿が海岸近くにあったかとも思われるが、昌穏庵は樹敬寺の嶺松院にあったことが知られるので、この表現は文飾か。

（11）浅野晃氏「芭蕉と伊勢俳人―足代弘員・龍尚舎・路草久保倉右近―」（「皇学館大学紀要」2、昭和三十九年三月）

（12）雲英末雄氏蔵。『西山宗因生誕四百年記念　宗因から芭蕉へ』（図録）掲載。尾崎千佳氏「宗因の伊勢道中句懐紙」（「会報　大阪俳文学研究会」38、平成十六年十月）参照。寛文十三年とする考証に従う。ただ、「浦の名も」の句を二見、「遠山田」の句を山田での句として「松坂にて興行共」の前書は、切り離して考えようとされていたが、『俊正集め句』の全貌が明らかになった今は、この前書は、以下の句のすべてにかかるものと思われる。

（13）佐藤勝明氏蔵。同氏「新出史料六点―貞徳・季吟・宗因・其角・去来―」（「連歌俳諧研究」118、平成二十二年三月）。

（14）はじめ松ケ島に俊正の別邸があったのではないかと考えていたが、『松坂権輿雑集』所収「蒲生飛騨守氏郷町中掟之事」（天正十六年十一月晦日）の中に、「於松ケ嶋百姓之外、町人相残リ居住之義一切停止事」の条文があり、平成二十五年八月十七日に本居宣長記念館を訪れた折、館長の吉田悦之氏は俊正の別邸が松ケ島にあったとは考えられないと言われる。ただし、松坂の町人が、客人を遊楽に誘った海岸の地に大口があり、北村季吟の貞享四年『伊勢記行』の折も、五月二十一日に、「大口といふ所に行て、海辺なれば雲井に見ゆる波いと珍らし。最勝寺といふ寺にてしばし休めり」と見えることを指摘された。松坂湊は、江戸初期紀州藩により坂内川河口付近に大口港を築いた（角川地名大辞典）とあり、宗因も大口の湊に着いたものと思われ、大口の湊近くに俊正の別邸があったことは可能性があろう。

（15）『西山宗因全集』第五巻「記録」所収

（16）天理図書館蔵。すでに野間氏指摘のように「為」は「又」の誤写と思われる。

（17）九月十四日付、園田平十郎宛宗因書簡。

（18）平成二十四年、ブイツーソリューション刊。

（19）早く注5の岡本勝氏の著に紹介されている。

付記　本稿は『西山宗因全集』編纂の中より生じたもので、とくに尾崎千佳氏の教示によるところが多い。また、松坂の実地調査に先導し種々教示された岡本聡氏、わざわざ松坂を車で案内し貴重なご教示を得た吉田悦之氏に感謝する。なお『於豊前小倉御城御賀千句』の翻刻に当たっては石水博物館の特別のご配慮を得た。

なお、校正中に、尾崎氏より、八代市正教寺新収の「古松雪うへし時かゝれとてしも雪の松　宗因」の宗因自筆短冊を教示された。『俊正集め句』の句形は発案ではないかと思う。

（しまづ・ただお　本学名誉教授）